様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月２９日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2005～2008
課題番号：17330142
研究課題名（和文）　言語知識の獲得とその規定要因の解明

研究課題名（英文）　Acquisition of linguistic knowledge and the regulated factors

研究代表者
小椋　たみ子(OGURA TAMIKO)
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号:60031720

研究成果の概要：
第一に言語構造、養育環境（親の働きかけ、メディア環境、家族環境など)、個体要因（物理的世界の認知能力、社会的認知能力、気質、出産時情報など）の言語発達への影響を明らかにした。
第二に親の報告から言語発達を測定するマッカーサー乳幼児言語発達質問紙の妥当性が実験と観察データから高いことを明らかにした。
第三に言語構造の違い（複数の形態素の有無）が認知へ寄与するかどうか明らかにした。
第四に大人の言語との比較を基調に、子供の言語を(i)非対称性、(ii)「幼児語」の音韻構造、(iii)アクセントの獲得、(iv)促音の出現、以上の４つの観点から明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
17 年度	7,100,000	0	7,100,000
18 年度	3,900,000	0	3,900,000
19 年度	2,200,000	660,000	2,860,000
20 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
総　計	15,000,000	1,200,000	16,200,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：言語発達、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙(CDI)、単数・複数、幼児語・育児語の音韻論

１．研究開始当初の背景

言語獲得はヒトに付与された言語に独自な生得的な能力が大きな役割を果たすことは勿論であるが、子どもの物理的世界の認知、社会的刺激の認知をはじめとする言語以外の個体内能力や、養育者からの働きかけが言語獲得で重要な役割を果たしている。

申請時点においては、言語構造、養育環境の言語発達への関与を明らかにするために、モノリンガル児(日本語獲得児、英語獲得児)、バイリンガル児を対象として、音韻（音声知覚、表出)、語彙、文法の言語知識の発達過程を明らかにすることと、言語獲得における個人差（発達速度、スタイル）を規定する個体要因、環境要因を縦断研究と横断研究から明らかにすることであった。

２．研究の目的

(1)言語獲得を規定する個体要因（事物認識、社会的認識、気質、出産時情報など）と環境要因（メディア環境、家族環境など）を明らかにする。
(2)語彙獲得に影響を及ぼす養育者の働

きかけを明らかにする。
(3)親の報告から子どもの言語発達を評価するマッカーサー乳幼児言語発達質問紙日本語版(JCDIs)の妥当性の検討を行う。
(4)マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の日米の標準化データから言語発達の日米の共通性と差異を明らかにする。併せて、定量的な把握を試みる。
(5)言語構造が認識に与える影響を数の獲得（単数、複数）を通して比較言語学的に明らかにする。
(6)言語知識の獲得、特に音韻の生産と知覚の発達過程を明らかにする。

３．研究の方法
(1)言語獲得の規定要因
対象児: 5ヶ月から15ヶ月まで2ヶ月間隔、その後30ヶ月まで3ヶ月間隔での縦断研究への参加児31名に対して選好注視課題、対面課題、親への質問紙を実施した。選好注視課題はPC液晶モニターに社会性の感受性を測定するために強度を異にするペアの刺激（顔に対する感受性の検出刺激、視線に対する感受性の検出刺激、　社会的因果性検出刺激）を呈示し、選好刺激への注視時間を測定した。対面課題 はStill faceへの反応、社会的情報収集、模倣、事物操作行動、指さし理解、事物への指差し発動で各課題に対して行動の生起を評価した。親記入の質問紙はマッカーサー乳幼児言語発達質問紙(JCDIs)、KIDS乳幼児発達スケール、気質質問紙、子どもの絵本・TV・ビデオ視聴時間、子どもの情報（性別、出産時体重、予定日早遅週数)、家族情報（兄弟数、家族数、父母の教育歴）についての質問紙であった。
(2)養育者の働きかけと語彙発達
14, 17,21ヶ月児母子各20組の5分間の玩具遊び場面での母子の共同注視(頻度、持続時間)と養育者の母親の働きかけの方略、手段、動作内容、発話内容を分析した。24ヶ月、33ヶ月時点の語彙発達をJCDIsで養育者が評価した。
(3)JCDIs妥当性検討
①語彙理解：17ヶ月39名と18ヶ月4名、計43名について JCDIs 語彙理解の 17 ヶ月の通過率が66%以上(Easy)、33-65％(Moderate)、32% 以下 (Difficult) の語を各5ペア、計15 ペアに対して Nonprompt phase と Prompt phase(target語がどっち)でのtargetへの注視率を target/ (target + distractor) *100で算出した。JCDIs語彙理解能力により高群、中群、低群の3群に分類した。
②語彙・文法表出：19 ヶ月から 28 ヶ月児平均22.2ヶ月66名（男児35名、女児31名）に対して、大学の観察室で一定の玩具での母子の5分間のままごと遊び場面と絵本読み場面5分間の計10分間の発話のトランスクリプションを作成し、自発発話の語彙をBates, et al.,1994）にしたがって、普通名詞類（語彙チェックリストの下位カテゴリーである動物の名前、乗り物、おもちゃ、食べ物と飲み物、衣類、体の部分、家具と部屋、小さな家庭用品の語彙カテゴリー)、述語類（動作語とようす・性質の語彙カゴテリー)、社会・個人語類（日課とあいさつ、会話語)、と閉じた語類(代名詞、質問、位置と場所、数量、接続語）に分類した。各語類の語彙数、自発の総表出語彙数、助詞数、助動詞数と子どもの自発発話について形態素MLU（総形態素数/発話数）をカウントした。また、JCDIへの自宅での記入を養育者に依頼した。表出語彙について観察で述べた各語類の語彙数、総表出語彙数、助詞数、助動詞数、３つの最長発話の最大文長(MSL)(総形態素数/記入発話数)を算出した。
(4)語彙発達の日米比較
日米のCDIs標準化データを使用した。米国データはWords and Gestures版は8-18ヶ月男児 408、女児 409、 計 817 名。Words and Sentences版は16-30ヶ月男児 561、女児569、計1130名。日本データは語と身振り版は8-18ヶ月男児652、女児578、計1230名。語と文法版は16-30ヶ月男児1090, 女児1022 、計2112 名。Common nouns（普通名詞）、Predicates(述部)、Closed class(閉じた語類。Helping verbs を日米でカウントしない）の語彙数をBates et al.(1994)に依拠して算出した。表出、理解語彙総数に対する各語類の割合を算出した。更に、折れ線回帰分析の手法を用いて、各変数ごとに特定の月齢において不連続な変化が生じていることや、パーセント点ごとに変化点に幅を持たせる分析方法を適用した。
(5) 単数、複数の認識と言語構造
日本語獲得児 19－27 ヶ月児(平均 23.29 ヶ月)52名に対してFeigeonson, L. & Carey, S. (2004)のmanual search paradigmで1個と3個、1個と4個のボールを探索する時間を測定した。
(6) 音韻の生産と知覚の発達過程
　大人の言語との比較を基調に、子供の言語を(i)非対称性、(ii)「幼児語」の音韻構造、(iii)アクセントの獲得、(iv)促音の出現、以上の4つの観点から分析した。

４．研究成果
(1) 1 歳半の語彙理解、語彙表出を規定する乳児期の個体要因、環境要因：研究の方法(1)で述べた変数と JCDIs で評価された1歳半の理解語彙数、表出語彙数の相関を算出し、有意な相関があった変数を投入し、語彙理解数、語彙表出数を目的変数として Stepwise の重回帰分析を行った。1 歳半理解語彙数を説明

する変数は7ヶ月 away(-)(視線に対する感受性の検出刺激)、9 ヶ月 KIDS 操作、母親教育年数(-)であった。1歳半表出語彙数を説明する変数は11ヶ月 JCDI 代置の遊び、11ヶ月観察での他者への事物慣用操作、7ヶ月の社会的因果性刺激（追跡ボール）への選好であった。子どもの気質や絵本・TV・ビデオ視聴時間、子どもの情報（出産時体重、予定日早遅週数)、家族情報（兄弟数、家族数）は1歳半の言語発達を説明していなかった。

事物操作の運動実行系は表出を、視線に対する感受性の低さは理解語彙数の低さを説明していた。また、高学歴の母親は子どもの語彙理解能力を低く評価していた。

(2)養育者の働きかけと語彙発達

14、17、21ヶ月の各観察時点においても、24ヶ月、33ヶ月の追跡時点でも JA(共同注視)・非 JA（非共同注視）エピソード生起回数、各エピソード総時間、また一回あたりのエピソード持続時間と JCDIs の表出語彙数の有意な相関はなかった。

JA、非 JA 中の母親の働きかけ(方略、手段、動作内容、発話内容）と総表出語数の観察時点、追跡時点での相関をみると、母親の働きかけの方略については14ヶ月児の非 JA 中の維持が 24 ヶ月の追跡時点の総表出語数と正の相関があった。手段については21ヶ月児の JA 中、非 JA 中とも母親の動作だけでの働きかけは追跡 33 ヶ月時点の語数と負の相関があった。動作内容と総語数の相関は21ヶ月の非 JA 中の母親の例示と観察時点で正の相関、JA 中の手渡しと 33 ヶ月時点の追跡と負の相関であった。母親の発話内容については 17 ヶ月児の母親の JA 中の形状・状態についての説明（例：赤い積木が沢山あるね）は観察時点でも 24 ヶ月の追跡時点でも総表出語数と正の相関があった。21ヶ月児の非共同注視中の母親の質問（例：これ何？）は観察時点でも 33 か月の追跡時点でも総表出語数と正の相関があった。

母子 JA の量的な時間や頻度よりも JA 中でも、非 JA 中でも、母親の働きかけの方略、手段、動作内容、発話内容が観察時点や追跡時点の総表出語数に影響があり、また、月齢により言語発達と関連のある働きかけは異なっていた。日本の母子の共同注視が語彙獲得を予測していないことが本研究から明らかとなったが、母子の視覚的な共同注視に文化的な差があるのか非常に興味ある問題が提起された。

(3)JCDIs 妥当性の検討

①JCDIs 語彙理解：子どもが容易に理解している刺激語(easy)の画像は理解が困難な語(difficult)よりも注視率が高かった。語彙理解程度が中群の子どもで easy 語の注視率が difficult 語よりも有意に高かった。Phase の効果は理解低群において prompt phase のほうが nonprompt phase より有意に注視率が高かった。17,18 ヶ月児の選好注視法による語彙理解能力の測定は、語彙理解能力が低い子どもで有効であった。語彙理解についての親の報告は語彙理解能力が低い子どもについては妥当性があるが、語彙理解能力の高い子どもに対しては Houston-Price et al. (2007) と同様、親は子どもの語彙理解能力を低く評価しているかもしれない。、また、語彙理解能力が高い群は選好注視法での語彙理解能力測定が不適なのかもしれない。

②JCDIs 表出の妥当性の検討：子どもの言語に関する親の報告（JCDI）と母子の遊びや絵本場面での言語使用に関する 10 分間の行動観察データとの相関は、表出総語数については.748,文法測度の MSL（最大文長）と MLU(平均発話長)は.687 で、他の測度も.60 台から.70 台であり、親の報告の妥当性は観察で保障されたといえる。日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙は子どもの語彙発達や文法発達を調べる有力な道具になりうると判断される。

(4)日米の子どもの語彙発達における共通性と差異：①早期表出語と早期理解語：日米の子どもの 50%が最初に通過した月齢から早期表出語と早期理解語について上位 10 語をみると、日米の表出語で共通(意味から)していたのは、バイ/bye、はい/hi、ワンワン/dog、あーあっ/uh oh の4語で、理解語はバイ/bye、（イナイナイ）バー/peekaboo、自分の名前/child’s own name、だめ/no であった。日米とも挨拶のことばや生活の中の身近な語が表出、理解されていた。また、日本で b の音韻で始まる語が 3 語、米国で 4 語であった。早期 10 語の 50%通過月齢は、表出、理解とも米国児のほうがはやかった。

②日米の子どもの語彙の構成：

初期の子どもの語彙が Common nouns の占める比率が高く、次に Predicates、次が Closed class であることは、英語、スペイン語、イタリア語、ヘブライ語獲得児の結果でも報告されている。言語発達初期の子どもは Common nouns を学習しやすい概念的傾向を有することが本研究の結果でも確認された。日本の子どもが米国児より Common nouns の占める比率が低い要因は、主語や目的語となる名詞が文脈から明らかであれば省略できる日本語の特徴や養育者の言語入力の違いなどによることが予想される。Predicates が 300 語以上で日本児が米国児より高かったのは、日本語では文末に動詞、形容詞が位置し、強調されることによる日本語独自の特徴に起因すると考え

られる。また、形容詞の表出が身振り版では語彙サイズが 11 語以上から、文版では 101 語以上から日本が米国より高かった。その要因については言語入力、言語の特徴、子どもの感性の発達などの面から今後、比較、検討する必要がある。
③各変数に関して月齢ごとの回答数をモデル化する際に、折れ線回帰分析の手法を用いて、エクセルと SPSS を併用して分析する方法を紹介した。
(5) 単数・複数の認識と言語構造
22 か月までに日本の子どもは 1-3,1-4 の区別をしていることが明らかとなった。この結果は Barner et al.(2007)の 1-4 の区別を米国の 22 ヶ月児がはじめて成功した結果と一致しており、単数、複数の区別の形態素を有する英語獲得児の結果と日本の子どもの複数の認識の獲得は同時期で、言語での単数―複数の形態素の知識は単数・複数の認識を促進していないことが明らかとなった。
(6) 音韻の生産と知覚の発達過程
① 大人と子供の音韻現象にそれぞれどのような非対称性(asymmetry)が見られるか考察し、赤ちゃん言葉の韻律構造と成人の音韻現象に共通した非対称性が見られることを指摘した。また、摩擦音と閉鎖音の間の有標性の違いが、音韻獲得や方言の音韻現象にどのように現れるかも考察した。
② 一般に「幼児語」(あるいは育児語) と呼ばれる語彙の音韻構造を分析した。プロソディー構造 (語の長さや、音節構造、アクセント構造) において、幼児語とオノマトペ (擬音語、擬態語) に共通性が高いことを明らかにし、大人の語彙との比較を行った。また、プロソディー構造に関して、日本語の幼児語と英語の幼児語の間に共通性が高いことを明らかにした。
③ 日本語のアクセントの獲得について検討した。「すべての語のアクセントが心的辞書に記載され、子供も語ごとにアクセントを獲得する」という従来の考え方に対し、辞書指定を受けるのは有標なアクセント型のみであり、無標なアクセント型は規則によって獲得されるという仮説を立て、それを統計的な観点から実証した。
④ 日本語の外来語に頻出する促音の生起条件を考察し、「ブック」「マックス」などの外来語と「ダッコ、ポンポン」などの幼児語 (育児語) が共通した韻律構造を示すこと、両者に見られる重音節の生起が共通の原理に支配されていることを明らかにした。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕(計 24 件)

① Li, p.,Ogura, T., Barner, D., Yang, S., & Carey, S. Does the conceptual distinction between singular and plural sets depend on language? Developmental Psychology, in press. 査読有
② 小椋たみ子、シンボル機能の発達とその支援：言語獲得の予測要因、発達障害研究、査読無、30(3)、2008、164-173.
③ 小椋たみ子、日本の子どもの語彙発達の規準研究：日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙から、京都国際社会福祉センター紀要 発達・療育研究、査読無、24、2008、3-24.
④ Kubozono, Haruo. Japanese accent. Handbook of Japanese Linguistics. (Oxford University Press), 査読有,2008, 165-191.
⑤ 窪薗晴夫、促音の謎、言語、査読無、37-5、2008、98-99.
⑥ Itakura, S., Ishida, H., Kanda, T., Shimada, Y., Ishiguro, H., & Lee, K.S. How to build an intentional android: Infants' imitation of a robot's goal-directed actions. Infancy, 査読有, 13, 2008, 519-532.
⑦ Nakao, H. & Itakura, S. An integrated view of empathy: Psychology, philosophy, and neuroscience. Integrative Psychological & Behavioral Science, 査読有, 10, 2008, 1007-1012.
⑧ Okanda, M. & Itakura, S. Do Japanese children say 'yes' to their mothers? A naturalistic study of response bias in parent-toddler conversations. First Language, 査読有, 27(4), 2007, 421-429.
⑨ Moriguchi,Y., Lee K., & Itakura,S. Social transmission of disinhibition in young children. Developmental Science, 査読有,10, 2007, 481-491.
⑩ 小椋たみ子、日本の子どもの初期の語彙発達、言語研究、査読無、132、2007、29-53.
⑪ Sarnecka, B.W., Kamenskaya, V.G. , YamanaY., Ogura,T. & Ydovina, Y.B. From Grammatical Number to Exact Numbers: Early Meanings of One, Two, and Three in English, Russian, and Japanese. Cognitive Psychology, 査読有, 55, 2007, 136-168.
⑫ 窪薗晴夫、レキシコンとアクセント指定、レキシコンフォーラム、査読有、3、2007、1-32.
⑬ 窪薗晴夫、幼児語の音韻構造、言語、査読無、35-9、2006、 28-35.

⑭ 小椋たみ子・綿巻徹、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の開発：「語と身振り」版を中心に.　京都国際社会福祉センター紀要　発達・療育研究、査読無、21、2006、3-26.

⑮ 稲葉太一・小椋たみ子・綿巻徹、乳幼児の言語獲得のモデル化：SPSS とエクセルを用いた計算法.　京都国際社会福祉センター紀要　発達・療育研究、査読無、21、 2006、27-39.

⑯ 小椋たみ子、 養育者の育児語と子どもの言語発達. 『言語』、査読無、35-9、2006、68-75.

⑰ 小椋たみ子、 言語獲得における認知的基盤、心理学評論、査読無、49(1)、2006、25-41.

⑱ 小椋たみ子、子どもの言語獲得編集にあたって、心理学評論、査読無、49(1)、2006、3-8.

⑲ Ogura, T., Dale, P. S., Yamashita, Y., Murase, T., & Mahieu, A. 、The use of nouns and verbs by Japanese children and their caregivers in book-reading and toy-play contexts. Journal of Child Language, 査読有, 33, 2006, 1-29.

⑳ MacCarthy, A., Lee, K., Itakura, S. & Muir, D. Cultural display rules drive eye gaze during thinking. Journal of Cross Cultural Psychology, 査読有,37, 2006, 717-722.

㉑ Ogura, T. How the use of 'Non-adult words' varies as a function of context and children's linguistic development. Studies in Language Sciences(5)、査読有、2006、103-120.

㉒ Kubozono, Haruo. [ai]-[au] asymmetry in English and Japanese. English Linguistics, 査読有,22-1, 2005 ,1-22.

㉓ 窪薗晴夫、日本語音韻論に見られる非対称性」、音声研究、査読有, 9-1, 2005, 5-19.

㉔ 板倉昭二 見出される意図：比較認知発達科学からのアプローチ、　人工知能学会誌、査読有、20、2005、387-393.

〔学会発表〕(計 30 件)

国際学会

(1) Ogura, T. Early predictors of linguistic abilities at 18 months. XIVth European Conference on Developmental Psychology, 2009, Aug. 18-22, Vilnius,Lithania.

(2) Itakura, S. Social transmission: Whom do you trust? Invited Talk at Selective Trust Work Shop. July 25th, 2008, Kingston, Canada.

(3) Kubozono, H. Consonant gemination in Japanese loanword phonology. 18th International Congress of Linguists. Korea University, July 24th, 2008, Seoul.

(4) Ogura, T. The relationship between imitation types and language development. XVIth International Conference on Infant Studies, March 28th, 2008, Vancouver, Canada.

(5) Shimizu, M. Developmental change of joint attention and non-joint attention. XVIth International Conference on Infant Studies. March 27th, 2008, Vancouver, Canada.

(6) Itakura,S. Do Infants Prefer Possible Human Movements? 13th European Conference on Developmental Psychology, August 23th, 2007, Jena, Germany.

(7) Ogura, T. Problem solving by Foresight in the Means-Ends tasks in Chimpanzees (Pantroglodytes). SRCD Biennial Meeting.April 1st, 2007, Boston, U.S.A.

(8) Itakura, S. Do infants prefer human possible movement? Kyoto University -University of Lancaster Joint Symposium. Oct.6th, 2006, Lancaster, UK.

(9) Ogura, T. Comparative study of early language development and cognitive development in U.S. and Japan. Xth International Congress for the Study of Child Language, July, 27th, 2005, Berlin, Germany.

国内学会

(10) 小椋たみ子　母子の共同注意、母親の働きかけと語彙発達、日本教育心理学会第 51 回総会、2009 年 9 月 20-22 日、静岡.

(11) 小椋たみ子　乳幼児期の気質と精神発達、日本心理学会第 73 回大会、2009 年 8 月 26-28 日、京都.

(12) 小椋たみ子　乳幼児期の気質次元と安定性、日本赤ちゃん学会第 9 回学術研究集会、2009 年 5 月 17 日、彦根.

(13) 小椋たみ子、言語発達の支援（シンポジュウム）「言語発達における認知的基盤と養育者の働きかけ」、第 20 回日本発達心理学会、2009 年 3 月 21 日、東京.

(14) 小椋たみ子、Piaget を読み直す：創造性をめぐって（シンポジュウム）「前言語期

から言語期への移行における創造性」、日本教育心理学会第 50 回総会、2008 年 10 月 10 日、東京.

(15)小椋たみ子、1 歳半の語彙理解、語彙表出を予測する乳児期の要因、日本心理学会第 72 回大会、2008 年 9 月 19 日、札幌.

(16)板倉昭二 メンタライジングの発達 日本認知科学会第 25 回大会　招待講演 平成 20 年 9 月 7 日、京都.

(17)小椋たみ子、日米の子どもの語彙発達における共通性と差異、言語科学会第 8 回国際大会、2008 年 7 月 13 日、静岡.

(18)小椋たみ子、選好注視法と親の報告による語彙理解、日本赤ちゃん学会第 8 回学術研究集会、2008 年 4 月 12 日、大阪.

(19)志水恵見、母子共同注意における母親の注意喚起行動、日本赤ちゃん学会第 8 回学術研究集会、2008 年 4 月 12 日、大阪.

(20)小椋たみ子、新しい乳幼児健診にむけて（シンポジュウム)「健診項目：言語発達の基盤」第 19 回日本発達心理学会、2008 年 3 月 21 日、大阪.

(21)志水恵見、母子共同注意の発達変化：共同注意の持続と子どもの母親への追随注意、第 19 回日本発達心理学会、2008 年 3 月 20 日、大阪.

(22)高向佑佳、逆模倣の認知に関する研究、第 19 回日本発達心理学会、2008 年 3 月 20 日、大阪.

(23)小椋たみ子、１歳半の子どものコミュニュケーション・言語の発達を予測する要因についての研究、第 19 回日本発達心理学会、2008 年 3 月 19 日、大阪.

(24)小椋たみ子、模倣とコミュニュケーション能力 日本赤ちゃん学会第 7 回学術集会、2007 年 7 月 1 日、埼玉.

(25)小椋たみ子、乳児期の気質の構造と一貫性　第 18 回日本発達心理学会、2007 年 3 月 25 日、埼玉.

(26)福田早苗、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の妥当性の検討、第 18 回日本発達心理学会、2007 年 3 月 24 日、埼玉.

(27)小椋たみ子、乳児における社会的認知の初期発達（４）－気質との関係－日本心理学会第 70 回大会、2006 年 11 月 4 日,博多.

(28)小椋たみ子、言語コミュニケーションの発達と評価―最新の評価法と適用の可能性について「日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙(JCDIs)の開発」、日本教育心理学会第 48 回総会、2006 年 9 月 16 日、岡山.

(29)窪薗晴夫、Accent and the Lexicon in Japanese. 言語科学会第 8 回年次国際大会基調講演. . 2006.6.10.国際基督教大学、東京.

(30)板倉昭二、日本の子どもの発達コホート研究：他者理解の発達　ワークショップ「日本の子どもの発達コホート研究」招待講演第 47 回日本小児神経学会総会、2005 年 5 月 20 日、熊本

〔図書〕(計 5 件)

① 小椋たみ子(2008). 障害児の言語発達. 小林春美・佐々木正人(編)、新・子どもたちの言語獲得、 大修館書店、201-229.

② Itakura, S. & Fujita, K. (2008). Origins of social mind: Evolutionary and developmental view. Springer, 211 ページ.

③ 板倉昭二(2007). 心を発見する心の発達. 京都大学学術出版会、183 ページ.

④ 小椋たみ子(2006). 言語獲得. 針生悦子 (編)、言語心理学、朝倉書店 、158-179.

⑤ 板倉昭二(2006). 「私」はいつ生まれるか. ちくま新書、187 ページ.

６．研究組織

(1)研究代表者

小椋　たみ子(OGURA TAMIKO)
神戸大学・人文学研究科・教授
研究者番号：60031720

(2)研究分担者

窪薗　晴夫(KUBOZONO HARUO)
神戸大学・人文学研究科・教授
研究者番号：80153328

板倉　昭二(ITAKURA SHOJI)
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：50211735

稲葉　太一(INABA TAICHI)
神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：80176403

末次　晃(SUETUSGU AKIRA)
いわき明星大学・人文学部・准教授
研究者番号：4032489